

# 桃源郷を見つけた男

人類が思い描く桃源郷、シャングリラ。

この伝説はこの小さな古城で生まれ、あるユダヤ人によって世界に伝えられた。



野中章弘

1953年 兵庫県生まれ。アジアをフィールドに活字、写真、ビデオによるレポートを続ける。著書に「沈黙と微笑」絆と絆 など。早稲田大学、東京大学講師。アジアプレス代表。

伝説はヒトが創るものである。いつの世も物語に飢えている人々に、わずかばかりの「夢」を与えてくれる。

長江にまつわるものでは、雲南省麗江に残る、シャングリラ伝説が面白い。ロマンという点でもなかなか惹かれるものがある。シャングリラを日本語に訳せば、「桃源郷」という意味に近い。つまりシャングリラ伝説とは麗江こそ、「人類の理想郷の本来の元」というものだ。

なぜこの地が桃源郷と呼ばれたのか。私は手ベツト取材で少々疲れていた頭をリフレッシュすべく、シャングリラ伝説の謎を追ってみた。

数日間、麗江の街を走り回り、新聞記者や文化人、学者たちを取材した結果、ひとりのユダヤ系米人の名前が浮かんできた。ジョセフ・F・ロック。今から80年ほど前彼は米国地理学会から植物調査の



1930年代頃、この地を調査したロック氏（左端）

# 麗江下 長江 を行く



ために派遣され、二十数年間の滞在記録を書き残した人物である。ロックは知的好奇心に満ちた、冒険心あふれる男で、欧米とはまったく異なる文化を持つ人々の生活や風俗を生き生きと描いた。当時、この地域は知られざる秘境であり、インディ・ジョンズばりの勇気と探究心を持って調査旅行を重ねたという。

「子供には優しくつたね。書齋で騒いでいても何も言わない。ただ、いつも銃を持ち歩いていて、外出するときはカゴに乗り、とても偉ぶっていたので、大人たちは怖がっていた」

幼い頃、ロックに会ったという趙万雲さん(70)は、遠い記憶の断片をつなくようにそう語った。理由はわからないが、女性とは一言も口をきかず、独身主義を貫いたらしい。もとより、このような辺境に來る人間はよほどの変人である。写真の中のロックを見ても、その神経質そうな表情を見る限り、艶っぽい話はちよつと想像しにくい。ただ通訳に雇ったチベット人の妻に横恋慕していたという証言もあり、

「シャングリラ」という言葉をよくよく調べてみると、語源はシャグ・リというナシ語の地名らしい。シャグは「香り」もしくは「低地」という意味であり、里である。1000年ほど前に建立された石碑にも、中国語で香格里拉(シャグリ)という文字が刻まれており、それが英語風に改められいまのシャングリラになったようだ。

ロックの清廉潔白度は不明である。

1920年代から30年代にかけて麗江に滞在したロックは、ナショナル・ジオグラフィックにこの地方の文化や歴史を記した小文を寄稿しており、英国の小説家ジームス・ヒルトンは、それを題材に小説「失われた地平線」を発表した。後にこの物語は映画化され、アカデミー賞を獲得。この中で初めて「シャングリラ」という言葉が使われ、以来、この地を桃源郷とする見方が定着したらしい。失われた地平線には、欧米人たちのオリエントに対する神秘主義の匂いが漂う。白人優越意識は鼻持ちならないが、この地に伝説を生み出した功績は認めねばならない。

現在、雲南省公認のシャングリラは麗江ではなく、北部に位置する中甸である。開発の遅れた中甸をシャングリラとすることで、観光客を呼び込み、ひと儲けしようという魂胆らしい。伝説の認定にも力ネがからむところが今の中国らしくて面白い。